

東嶺和尚假名法語

入道
要訣

快馬鞭

全

發行書肆 三倉文林堂

東嶺和尚假名法語



入道
要訣

快馬鞭

全

發行書肆 三倉文林堂

快馬鞭序



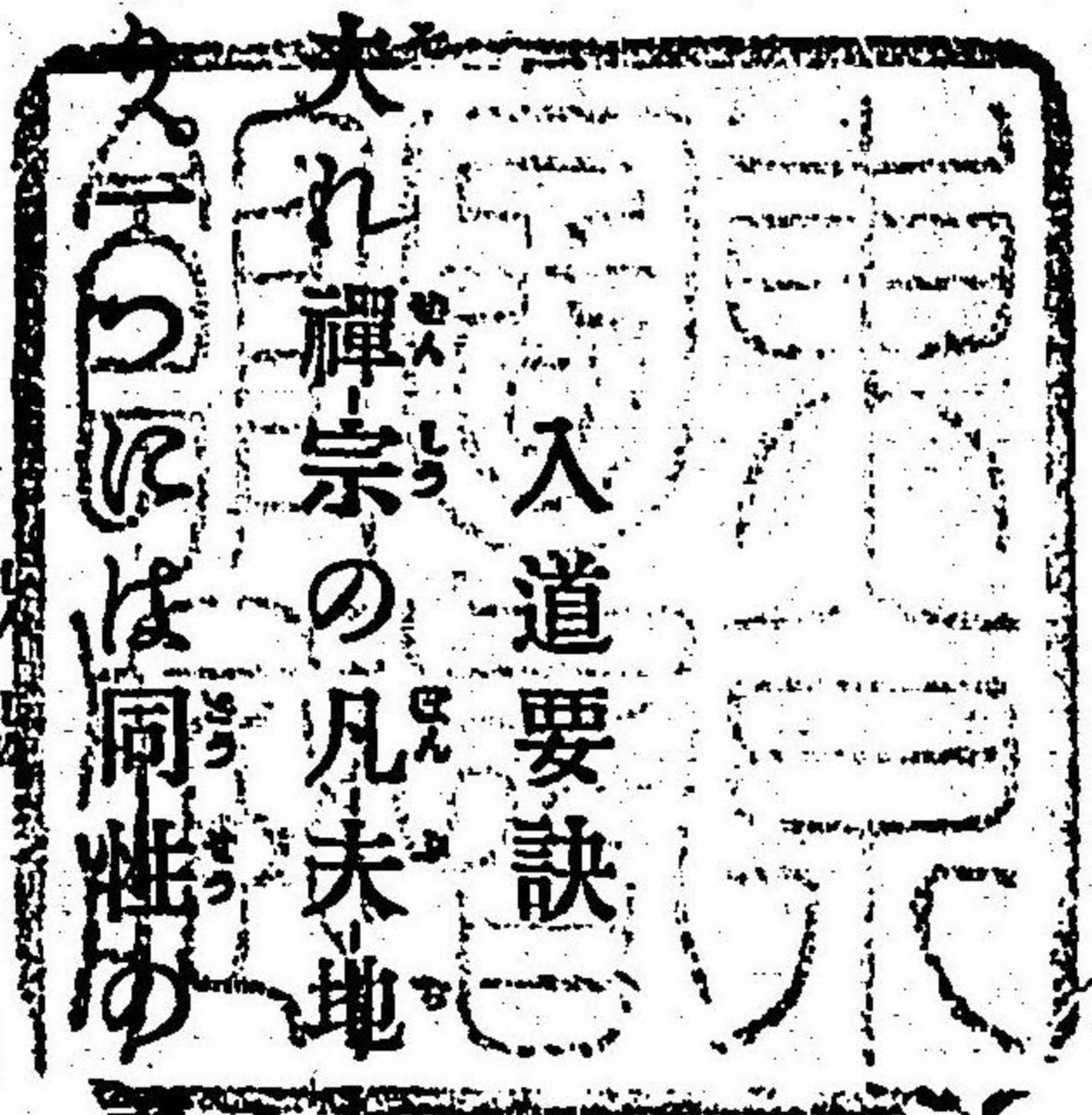
夫諸佛真源。衆生本有也。雖然因背覺自
 隔。緣合塵遂。失矣。於是三光老師。特悲憫
 爲誘引。願冀之徒。述法語數篇。并道歌廿
 一首。可謂極途。玉矩也。讀之則從。龐及細。
 自淺至深。親罄此道進趣之軌焉。若能熟
 讀而深。凝心慮者。大事因緣。其庶幾乎。爰
 某禪人。請叙斯篇之起盡。不忍確辭。因應

于其需。云爾。
寬政庚申六月日大靈叟書于濃陽壁觀
亭

東嶺和尚法語快馬鞭卷之上

小師了慧集

參學玄如校



入道要訣

夫禪宗の凡夫地より直に佛地に登ると云に五の料簡あり。二つには同性の義。二つには異塗の義。三つには憤勵の義。四つには進修の義。五つには歸本の義なり。是を要路とす。

○第一同性の義と云は

人人具足する本性と。三世諸佛の本性と無二なり。功德莊嚴も均し。光明赫奕たり。智慧神通悉く同じ。譬は大日輪の光明

二
の山河大地を照さざる處なきが如し。賤き糞土の上も貴き
金玉の中も替るとなく明かなり。然に盲人は其光りの中に
在ながら見ず知ず悲むべし。

○第二異塗の義と云は
本性は諸佛衆生と一體不二なれども其の意の指す處各別
なり。佛は内に向て本心を照し玉ふ。衆生は外に向て萬境に
巨る。故に愛する物に貪慾を起し。惡む者に瞋恚を起し。思ひ
凝て愚癡となる。此三毒の性に迷ひ昧されて本心をも失へ
り。貪慾深きものは餓鬼となり。瞋恚深きものは修羅となり。
愚癡深きものは畜生となり。三毒齊ものは地獄に墮て種種

の苦みを受く。是を四惡趣と云。恐るべきの至なり。貪瞋癡あ
れども自誠め恚にせざるものは人間なり。生生此の身を失
ず。貪瞋癡漸しづまりて誠めざれども恚まゝならざるもの
は天上に生。是を六慾天と云。三毒の性滅して定慧の徳あれ
ども定愛の見ありて瞋癡の餘習有り。是色天十八種の中に
生る。定愛已に盡れども未だ佛の知見を開かざる。是を無色
界の四天と云。聲聞緣覺の行者。此天にあり。前の四惡趣に人
天を加ふれば六道となる。聲聞緣覺と菩薩と佛とを加ふれ
ば卽十界となる。凡そ六道の中は設ひ人天の樂を受るも皆
苦の本なり。如何となれば貪瞋癡煩惱の深き心を以て。此世

界を成じ。此の身を感じ出せり。然は此業煩惱を滅せされば。解脱せず。此の六趣の苦界を解脱せされば。眞の安樂にあらず。此の苦界を解脱せんとならば。先無常を觀ずべし。生あるものは必ず死す。若きも頼け無し。強きも危し。富貴なるも衰ふ。尊特なるも保ち難し。長壽も八十年に過ず。然は此の世無常にして。樂むべきとなし。貧ければ無きに苦み。富ものは有に苦み。高きは高きに苦み。賤きは賤きに苦み。衣食に苦み。妻子に苦み。財寶に苦み。位官に苦む。兎に角に煩惱の性を亡じて。解脱の道に到されば。國王大臣諸天神仙の位に升るとも。電光朝露の如し。只しはしが間たなるのみ。縁合すれば了了みづかたして

としてあれども。縁散ずれば空し。父母の縁を假て此の身を得たり。地の縁を以て皮肉筋骨となる。水の縁を以て唾涕膿血となり。火の縁を以て暖和柔順なり。風の縁を以て氣息動轉す。此四縁忽盡れば。身冷に息絶て。我と云ものはなし。然時は。此身は實の我にあらず。只假の宿のみ。如何に此假の宿に貪著して。永劫の事を顧みざる。此無常苦空無我の四波羅蜜を觀して。菩提の道を求を。聲聞四諦の法と云。是れ諸佛入道最初の要門なり。又縁覺の十二因縁と云は。夫本心暗きが故に。種種の業を作る。是无明と行との二つなり。業つもりて習性となる。其父母に縁して胎内にやどる。是識と名色となり。

體形備て六根漸成を六處と云。出生れ未だ好悪を少も辨へざるを觸と云。三歳の後は早や花や味を悦び美しき色を愛する。是を受と云。十歳以後財色を求る心あるを愛と云。十五六歳を過ては頻に貪著するを取と云。廿歳より盛に業を作りて罪を恐ざるを有と云。此の業を作り罪を重ねる中に未來の生處は善惡とも定るを生と云。一生此の如の業のみ作りて老衰へて死する。是を人間十二因縁と云。縁覺は是事を觀じて煩惱を盡して菩提に入る。皆是諸佛入道の方便なり。無明の暗き心を悟りて其の實性を見得すれば。無明即佛性となり。行即道となり。識即智徳となる。然るときは。十二因縁

皆正法に隨順して遂に解脱の大果に到る。又菩薩の六波羅蜜と云は。布施持戒忍辱精進禪定智慧なり。前の聲聞縁覺二門の修行は。只自己一人の益にして利他の法なし。菩薩は自利道行の中。又化他の行を兼たり。法の爲に財を惜まらず。上げ師長に供養し。下貧賤に施與するは。是れ財施なり。已が智徳の分量に隨て。人の爲に説法教化するは。是れ法施なり。此二施を以て普衆生に施す。是を布施波羅蜜とす。内に道心を護持し。十重四十八輕の戒行を修するを。戒波羅蜜とす。觀理を忍受し。毀譽の境界に轉ぜられず。一念の瞋恨生ぜざる。是を忍辱波羅蜜とす。自利利他の大行に於て。日々に增長し。怠慢を

八
誠め勵み進るを精進波羅蜜とす。坐禪工夫を專一に心掛け。一切の妄想を離るゝを禪定波羅蜜とす。教理を究め佛意を察して諸の迷情を覺破するを智慧波羅蜜とす。是を菩薩の六波羅蜜と云。此の聲聞緣覺菩薩の修行を三藏とも云ひ。又は三乘とも云。諸佛成道の方便にして萬古不易の法なり。一佛乘の學者。是を小乘三藏の法なりとて痛く退くるは。小乘の偏見を碎て。大乘の妙理を開悟せしめんが爲なり。大乘の妙理を信解すれば。三乘の行門皆大乘門の輔翼なり。譬は臣民奴婢は君主よりは劣れりと雖ども。若是を捨る時は。君主の威徳を失ふが如し。臣民多きが故に君主尊し。小乘満足す

るが故に。大乘の道廣博なり。三世の諸佛。歴代の祖師も。皆是三乘の行門より。法成就には到るなり。今心ある人は。辨へ思ふべし。四惡趣の苦患。何れか恐れざらん。人天の福徳も頼むべきにあらず。鬼に角に。聲聞の四諦こそ。各が好修行なり。此世の中は皆苦なり。無常にして心ほそき栖居なり。何事も終に空に歸す。身すら我が物にあらず。況や妻子珍寶及王位。眷屬牛馬等をや。死する時は。獨行誰か我れに伴ふ。何物か身に隨ふ道具なる。今の他人は。前生の親子夫妻なり。今の親子夫妻は。未來の他人なり。今の牛馬魚鳥は。前生の眷屬なり。今の眷屬は。未來の牛馬魚鳥なり。業に引れ縁に隨て。如何なる

生を受け。如何なる身とならんも計り難し。然らば今の親子
夫妻の至て親きものも別れては何國に在て何と成て有ん
も知らず。骨肉の親みも唯五十年の間なり。譬は一夜の宿り
の友を以て深く愛し。餘の人を指て憎むが如し。一夜明て宿
を立出れば。其友は西東にちりて。我れ獨り行。先の憎みたる
人には。又其の夜の友となる。唯頼むべきは。菩提なり。求むべ
きは。佛果なり。此身は十二因縁を以て出來たる。業障の皮袋
なり。先無明の根元を破るべし。根元破て末葉の持つとはあ
らじ。財法の二施をも分に隨て心挂よ。佛の禁戒を守て犯す
と勿れ。物に堪忍して瞋を起すべからず。朝夕佛神に祈り誓

て勵み進て念念忘るゝ事なかれ。暇あらば坐禪せよ。法を聞
て迷ひを覺破せよ。是菩薩の六波羅蜜の法なり。其の根本性
は諸佛と同一體なれども。佛は内に向ひ。衆生は外に走るの
一念の錯りより。地獄。餓鬼。畜生。修羅。人間。天上の六趣。聲聞。緣
覺。菩薩の三乘。各各九界の衆生と分れたり。是を異塗の義と
云。其の本に歸すれば。又同く諸佛同一體なり。豈願わざるべ
けんや

○第三憤勵の義と云は

諸佛同體の性を得んとすれば。先無明の根元を明かにして
悟るべし。如何が明めん。自の本性を疑ふべし。如何が疑わん。

眼に色を見耳に聲を聞いて身には冷暖を覺へ意には逆順を辨まへ知るべし。是を見聞覺知とて修行の種なり。凡夫は色を見ては色に迷ひ聲を聞ては聲に迷ひ冷暖を覺ては冷暖に迷ひ逆順を知ては逆順に迷ふ。是を衆生の外に向ふと云なり。菩薩の修行は其の色を見る時は其の見底のものを疑ひ其の聲を聞く時は其の聞く底のものを疑ひ其の冷暖を覺る時は其の覺ゆる底のものを疑ふ其の逆順を知る時は其の知る底のものを疑ふ。是を諸佛の内に向ふと云此の如く修行する時は先凡夫衆生の向け處とは別なり。諸佛の向け處に均く其の智徳を成ぜざれども先は菩薩子中間へ入

りたりと知るべし。常に諸佛に大願を掛け神明に祈り祖師に誓ひ此の如く一大事を一度は成就して自利利他の願海に遊ばんと成り朝に起ては如何に鬧わ敷とも先此の一念を立て先此の見聞の工夫を試み而して後に其の作業に随ふ。食を喫時は先此の一念を先として此の工夫を試むべし。廁に登る時は先此の一念を立て此の工夫を試むべし。日暮て寝る時は暫く臥具の中に坐して是一念を先として此の工夫を試み而して後に身を放て臥すべし。是を諸佛菩薩の正直正路の修行とす。諸佛同體の本性を取失ひて六趣四生の間だに迷ひ來るとを憤ふりて根本性に向て工夫の心を

勵むべし。是を憤勵の義と云。

○第四進修の義と云は

先の根本の工夫の心を勵まして。念念に進み。事事の上に修し習ふべし。彼の工夫の正念を提て。行時は行時に修し。居る時は居る時に修し。人と言いふ時は。言いふ時に修し。言いわずして静かなる時は。彌正念をばけまし。物を見る時は。見る底を疑ひ。物を聞く時は。聞く底を疑ひ。事繁くして。物に奪れ易き時は。奪る底の物を疑ふ。此の奪るゝ底の物は。何物ぞと疑ふ時は。奪れても。又工夫の正念を離れず。病ひある時は。其の苦惱を以て。工夫の種とすべし。兎に角に。工夫は事の多き

も。又増進むの一端なるべし。只尋常物静なるのみならずは。工夫の精彩と云事はあるまじ。工夫の精彩なければ。得力と云ともなし。國の亂を治るには。大事に及んで。戦場に向て。已に危きに臨んで。恐れず取かゝり引返して。戦ふてこそ勝利は得るものなり。工夫の法戦も是に同じ。諸の境界に奪われ。諸の想念に亂さるゝこそ。勝負を決するの好時なり。此の心を辨へ。懈怠の心なく進むべし。物静かなる時は。是ぞ誠に城内に在て。兵法軍術を修鍊するなりと心得て。丹誠を抽んで。修行すべし。物躁しき時は。是ぞ戦場に臨で。勝負を決するの時なりと心得て。力らをつけて工夫すべし。得力の有も。あら

ざるも。共に諸佛菩薩正直正路の中へ。行装したる人人なり。譬は世の強盛なるものは。一日に十里十四五里を行に。弱きものは。五里三里を行がごとし。百里の遠き國に至んに。強き者は。八日九日には行き易し。弱き者は。廿日に及ぶべし。然れども。至りて後は。同じ國に居て。同じ人人のもとにあるがごとし。力をつけて精進勇猛なると。志さし怠て進み兼ねると。是に同じ。根性利根なると。鈍根なると。又同じ。病身にして成りがたきと。堅固にして行ひ安きも同じ。人の利鈍により。根機の強弱により。省悟得道の遅速はあるべし。修習する事と。道を得ると至ては。殊なるとなし。頼もしからずや。願くは賢

きも愚かなるも。貴きも賤きも。此正直修行の行装をせよがし。此の進修の中に。又一義あり。工夫純熟すれば。思わず量らず。得力を得べし。得力は有れども。修行は怠たるべからず。精彩を著れば。自から得力は有ものなれば。得力に大小有て。小悟は却て大悟の妨げとなる。小悟を捨て。取らざれば。大悟必ず得。小悟を取て捨ざれば。大悟必ず捨る。譬は人の小利を貪れば。大利を得ざるが如し。小利に貪著せざれば。大利必ず成る。小利積り積れば。終に大利に至る。小利を取りて進ざれば。一生只小悟の分際にして。大自在大解脱の境界に至ると能わず。大悟に至て大自在の道を得ざれば。事と理と相應せざ

るが故に。外道邪見の中に入る恐るべし。小悟を得ては。是を種として。愈進み。進み進んで修行すれば。諸佛の大利悉く現前し。祖師の關鎖自然に透過し。誠に事理相應し。行解不二にして。大解脱大自在の境界に至るなり。是を進修の要訣と云。一切の法理を盡し。一切の道徳を成じて。普く一切衆生を利益し。其機宜に應じて。説法教化すれども。足らざる處なく。我れと人と共に。大涅槃四徳の岸に到る。此大行大願を以て。生生世世自利利他を己が所作として。盡未來際退轉なかるべし。其の中間に誤りて退くとあれども。また打返し引戻し修行すべし。人の路を行に。脚よはく路滑かにして倒る。其の人

倒れたりとて。起されば。遂に其の所に轉び死す。倒れては。又起きあがり。又倒れては。起あがり。進み進み。竟は到るなり。經に曰く。一戒を犯すれば。直に佛前に懺悔して。又道に進むとは。此の事なり。

○第五歸本の義と云は

前の如く。工夫増進み。修行純熟すれば。終に諸佛同一體の性に歸するなり。是を成佛と云。禪宗の見性成佛と云は。此の處なり。最初の一念錯て。内の本心に向ふべきを。外の萬境に亘て。地獄。餓鬼。畜生。修羅。人間。天上の六道に浮き沈み。生を隔て世を累て。千生萬劫輪廻して。車の輪のごとし。同じ苦患を受

け來ること數へがたし。生生の骨を積は。毘浮羅山よりも高
く。其の膿血を漉へをかほ。大海の水よりも多からんと。如來
の説き玉ふなり。今得難き人間の身を受。殊更逢がたき佛法
に逢ひ。中にも大乘不思議の正法を聞くと。上もなき人人の
僥倖なり。是れを取誤て捨て置は。猶又上もなき罪なるべし。
一度人身を失へば。二度得がたきと。兜率天の上より。絹絲を
下して。大海の底なる針の耳を貫が如しと。又六道の輪廻は
生を隔てたる事のみにあらず。一日の中に。浮き沈みすると
なり。心正く事邪ならざるは人間なり。我に違ひて瞋恚を生
ずる時は修羅なり。我好む物に執著すれば。餓鬼なり。物思ふ

て。心ふさがる時は。畜生なり。思ひも深く。恪執も強く。瞋恚の
焰をやまずして。人を苦め。物を害する時は。地獄なり。是を人
の道を失ふて。三塗の種を作ると云。又時有て心静り。物思ふ
事なく。曾すみわたりたる時は。身は人間にあれども。心は天
に遊ぶと云。然れば凡夫の。一日は。六道を輪廻すると數を知
らず。其の中人の心を持つと少なり。況や天に遊ぶとをや。先
は畜生の物思ひ。餓鬼の恪執。修羅の瞋恚。三塗に遊ぶと多し。
動もすれば。地獄道に入て。人を苦しめ。物を害すると多し。誠
に一日の中。何の道に遊ぶと。多からんと見よ。先は惡道の心。
三分に二なり。人間は漸く一分を守る。地獄又其の中に交る。

左あれば。只尋常の心持にて。此の惡道は免れ難し。此の一日の中に。修行の心を發し。聲聞の四諦の修行。緣覺の十二因縁の觀法。菩薩の六波羅蜜の大道。此の心を起して。彼の三塗の種を斷ずべし。大乘の工夫を。勵み進んで勤むる者は。縱令得悟はいまだ得ざるども。三塗の心たへて。人天の遊を越て。菩薩の階級に升る。聲聞緣覺さへ尊ぶべし。況や菩薩の道をや。菩薩の道すら。尙有り難し。況や一佛乘の法をや。見性悟道は。諸佛頂上の禪なり。是を心にかくる者は。佛の直の子なり。念念の上。無上の功德門を成就し。舉足下足。皆般若の妙行に及ぶ。夫れ般若は。讀誦の功德すら尙貴し。況や是を行ふ者をや。

人を頼んで。讀誦せしむるすら。尙災厄を免る。況や自ら行ふ者をや。諸佛歡喜し。菩薩手を引。天神地祇は。此人を擁護し。惡鬼邪神は影を見ても。恐れ慄く。精靈幽魂は。此の人の縁にふれて。解脫の種を得んとを思ふ。是を最尊最上。最第一の法と云。分に隨て遵行すべき也已矣。

有信士某甲者。先携白紙一卷來。謁書于予。教誡予諾而收之。筒久矣。歲月相逼。無暇思索。因操觚任意漫書之。曰入道要訣。願晨昏看過。以爲進道之一鞭也。

寶曆丁丑孟陬日東嶺頭陀圓慈書

快馬鞭卷之上畢

東嶺和尚法語快馬鞭卷之中

小師了慧集

參學玄如校

奉大聖寺宮

籌宮様不圖遠く行脚に思召立せられ御淋しきのあまり。一
 入暑邪にもさへられさせ玉ふのよし親き友に別れては皆
 力落し候事常の義なり況や骨肉の御親みをや左こそあら
 せられ玉ぬれ是人倫の道なれば上も下も同じ習のくせな
 らめしかあれども只あながちに愁させ玉ふ計りにては凡
 夫衆生に同して道人の御心にてはをわさじ道人の御志と

申は再御對顔の思召こそ。いみしく候へ。左あればとて凡夫の
 人を尋る様に。御尋させ候のみにては。萬劫までも。再會は
 叶せ玉わず。若再會の時ある共。業縁にひかれて。やゝもすれ
 は。三塗に出逢もの多し。誠に御對顔の思召立には。法性觀に
 如ばなし。經に曰。三界唯心。萬法唯識と。三界とは。欲色無色の
 三界にて。貪瞋癡の三毒の境也。即今面前。目に見。耳に聞。是
 直に三界なり。此目にみる上。直に我本心也と觀じ。此耳に聞
 候上。直に我本心なりと觀ず。左あれば松は松の姿にして本
 心也。竹は竹の形にして本心なり。天井は天井なり。にて本心
 疊は疊の儘にて本心。衣裳は衣裳にして本心。飲食は飲食の

儘にして本心。山は山河は河。男は男女は女。人間は人間。畜生
 は畜生。其上其儘皆本心。本佛なりと。心を静めて。ひたすらに
 觀ずる。是を萬法唯識觀と申也。此法性觀を。常常御心挂有せ
 候へば。いつしか。心境不二の位に入玉ふて。諸佛聖者の道場
 に登せ玉へば。宮様何國ともなく。此道場の中に。御座有せ
 玉ひて。いつよりも。魔滅やかなる。御顔せにて。法喜禪悅の樂
 み。身にあまり。解脫超昇の徳。心にあらわれん。華嚴經に曰く。
 三界唯一心。心外無別法。心佛及衆生。是三無差別の大事。了了
 分明に開悟ならせ玉ふこと。大地は打はづすとも。全相違無
 きものなり。此心空無相の正觀なれば。大般若の深行となり。

諸法實相の妙觀なれば。法華經の一大事因縁也。禪宗絶念了當の工夫甚以近道なれども。かくつかれ玉ふ折節には。けわしき山坂は。及はせ玉わず。只此法性觀を。晨夕の慰みとし玉ひ。看經にも。坐禪にも。御心持悪きに付ても。是のみ觀じさせ玉は。誠に逆縁變じて。増上縁となりて。死者生者諸共に。手を把りて。毘盧頂顛をも。踏玉ふと云べきか。折節病中。再三心を碎き。書續けても。成難き筆に任せて。書亂し。捧け奉て。憚多きとに候へ共。一には。簾下の御心を。休め奉るの端共ならんや。遂は。成菩提院様。涅槃路上を。莊嚴し奉んどの。寸志なる而已。あながちに。文章の拙き。字法の正からざるを。とがめ

玉ふ事無れ。

答輕蔑神佛人

御細書の趣ぎ。披見を遂候處。多年文字の學路に遊て。近代世に行わる。儒士の教へを聞とし。召し玉ふものにて。中中參禪學道の器とは。相見へ申さず候へども。御不審を答へ申さぬも。本意なく存じ候故。荒荒書き記し進覽せしめ候。來書に儒道にて。事足ぬれば。神佛の兩道は。畢竟無益の義との。御覺悟なるよし。左も候は。隨分儒の道を相研かれ。仁義を踏あやまらぬ様に。五倫の間に行ひ得ぬ。人人をも。教化なされ。君を堯舜の君たらしめ。民を堯舜の民たらしめ。此の上何の

加ふる佛法かあらん。尙專らに御興行あれがしと祈り奉り候。古へ孔聖の世を去ると久しからざるに。皆人浮華に走りて口に仁義を云へども。誠は利養を貪り形に禮容を飾れども。心には忠孝を忘れし故に。莊子と云者出で、其の虚を誇て。世を定めんとせり。是又聖門の外護とこそ。覺へ侍べる。況や世下り。人つたなふして。誰か仁義の道を唱へ。誰か忠孝を專らとする。上一人より。下萬民に至るまで。仁義忠孝の貴きとを。知る者はなし。まして公侯伯子男の尊貴の位にある人は。文武の賢客を。左右に竝へ置て。朝には孔孟の席に交り。夕には孫吳が室を伺へは。行義忠孝は。世を治るの大本。智仁

勇嚴は。人を得るの根柱なるとは。耳に飽き胃に満て。しろしめさざるは。あるまじ。然るに。其貴きと知る。道を用ゆる事は。成り玉わで。動すれば。身の奢りに引れて。上を掠め。下を虐。先君先祖の血をしほり。膽を碎ひて。大業を樹られし。功恩を忘れ。果て。群臣萬民の膏を流し。身を苦しめて。財穀を捧ぐる。艱難は。露顧みず。己が一旦の口を悦はしめ。身を樂まんとて。衣食の美。男女の色に。心を味せる者。幾千人ぞ。此の時に當て。文武の諸官。巍巍として。前後左右に環列せる者。知れども。説と能わず。思へども。教るとあたわざるは。何ぞ。是他なし。心學道行の足ざるが故に。忘想の爲に。智慧を掩われ。利養の爲に。忠

孝を隔てられて。君の道を失つて。中庸を以て世を治むると能わず。臣の道を失て。直諫を以て。政とを正すと。能わざるが致處なり。此時若し心法を明め得て。忘想の本を斷。禪關を透り得て。利養の塵を碎く者あらば。君君たり。臣臣たり。父父たり。子子たり。各其の宜しきを得て。聖門の忠孝再び明にして。王者の大業。重て興らば。是誠に君を堯舜の君たらしめ。民を堯舜の民たらしむるにあらずや。心法は天下國家の益にあらず。禪關は士農工商の補ひにあらずと云て。可ならんや。且心性の説は。孟子に始り。程朱潤色したる者と。一向に削り去て。唐宋元明に。眞實の儒は絶て。二千餘歳の後。日本に一兩個

の眞儒ありと云と。心得がたき大言なり。譬へば。邊國に獨の英雄ありて。近國を斬服がへて。城郭を搆て。令を降し。法度を立。大言を吐て。帝王一人の外。霸主を始として。列國の諸侯は。共に皆政法を失ひ。俸を收め得ず。只人の財寶を掠めて。身を立。名を沽ものなり。今我獨こそ。道を諳じ。徳を富にして。眞の王佐の臣なりと云が如し。夫れ孔子を天子に比ゆれば。孟子は即霸主なり。漢魏より唐宋の諸賢は。列國の諸侯の如し。山川路隔りて。敵對なければこそ。何事もなく。罵詈雑言若し直に逢て。一戦に及ばゞ。邊將の小城争か。列侯の雄威に當り得ん。今の世の人。も左の如し。年代異にして。其の人なきが故に

已見を恣しまゝにすれども道と云ひ。學と云と。中中末代の者に及べき事にあらず。此旨能能思惟あるべきとなり。諸聖人の道は。只人倫の間にありつべき。行なひを成し玉ひぬれば。心性の理に關らずと云と。彼新儒の論より出でて。是又耳を掩て。鈴を偷むの教へなり。凡そ人。茶を呑。飯を喰ふ事。共に心に思て後にこそ成べけれ。況や君に忠を盡し。親に孝を爲とも。心に能く辨知て後。其の道を行ふものなり。然らば。心を離れて立る道と云は。一として有るべからず。定て宋儒の説の佛法心性の説に似たるを憎んで。一向に退けて。聖人の道は心性の義にあらず。只五倫の間の道のみと言へるならん。譬

は。人の弓箭を教るに。心持に用は無ぞ。只業を學べと云が如し。心焉にあらざれば。視れども見へず。聽けども聞へず。食へども。其の味を知らざれば。焉ぞ心を離れて。其の業を能するとあらん。彼且言わん。心は業に用のみ。其の性を明むるに足らずと。是又樹の枝葉花果を愛して。其の根莖を輕んじ。家の奴婢僕従を尊んで。其の主君を知ざるが如し。其花を愛して。其の根を知らず。其の僕を尊で。其の君を知らずんは。智と爲か。不智とせんか。且性は心の密なる者なり。根の深く藏れて見へざれども。必ずしも在が如し。其の根を知て移し芸らざれば。樹を成じて。花果を收むると能はず。君の嚴かに坐ませ

ども。窺ひ難しとて。極めて無しと言わんや。其の君を知て。従ひ事されば。家を治め。子孫を保ずると能わず。大凡上代の人。は。其根器利にして。而も心定れるが故に。聖人の道を行ふ者。自然に其の性に復りて。達するが故に。仁義忠孝の道皆性より發して。能節にあたるを得之。孔子も己に克て禮に復るは。仁を爲る之。一日も己に克て。禮に復れば。天下仁に歸す。仁をするは己による。人によらんやと云へり。是誠仁は性の上。に求て。人倫の間に。求むるにあらざる證なり。若人倫の間を云わんとせば。一日禮に復て。天下の人。何としてか。皆仁に歸せしめん。顔回三月陋巷に。仁を養ふとは。間居晏坐して。性

に復りて。仁を求むるとを言ひ。又剛毅木訥は。仁に近しと言ふ。此の性に復りて。仁を求むるには。一旦勵み進で。剛毅木訥の工夫に入らざれば。成辨し難き故なり。若し人倫の間に。行ふのみならず。柔順利辨の者こそ。仁にも近かるべきに。卻て剛毅木訥を近と云は如何。是許多參詳すべき。聖言ならずや。本より神道儒道共性理を離れては。其の道を得と能わず。末代は其の道を學べども。性理まで到るものなき故に。各只其の書のみ傳りて。旨を得る者稀なり。殊に吾朝は神國也。夫れ神道と云は。忝も日本の王道にして。人人の主君の正道也。然るを此の國に生ながら。神理をも究めずして。巫祝左道な

るとて輕んじて蔑玉ふは誠まことに本もとを忘るゝ事なりとや云わ
 ん。君きみを凌しのとや爲なん。凡まそ神道しんどうには三みつの教きょう有ありて。宗源しゆげん齋元さいげん靈宗れいしゆ
 と云いふ。中ちゆうにも齋元さいげんの神道しんどうは專政家せんせいけの道みちにて。五倫ごりんの道みちを明あら
 せり。是これ禁廷きんていに第一だいいちに行なるゝ法式ほうしきにて。大相國家たいしやうこくがの君臣きんしんの
 義ぎを守まもり。忠ちゆうを盡つも。皆齋元さいげんの神道しんどう也。又また神道しんどうに王道わうだう師道しだうの二
 義ぎあり。昔者むかし開天かいてんの始はじ。天祖てんそと云いへる大神たいしん。師道しだう六世りくせいの神かみ。高皇たかみ
 產靈尊うぶたまひのみことに詔みことばして。天竺國てんじくこくを開ひらき玉たまふ。同おなく七世しちせいの神かみ。神皇かみみ產靈
 尊うぶたまひのみことに詔みことばして。震旦國しんたんこくを開ひらかしめ玉たまふ。此この義ぎを以もて。天竺てんじく震旦
 は師道しだうの國くになるが故ゆゑに。下代しもよ教化けうかの道みちは。皆西せいより來きて。東とうに
 傳つたふれども。王道わうだうは吾國わがくにの正道せうだうなるが故ゆゑに。皇孫わうそん一統いつとうして。他ほか

姓せいを交まへず。君臣きんしんの義ぎ。賢正けんせいにして。神武じんぶ天皇てんかうより以來いらい。臣しんた
 る者もの君きみの位くらゐを篡せんと。一日いちにちも無な間ま。反逆はんぎやくの者ものあれども。皆みな天刑てんけい神
 の罰ばつを受うると。目前まへに分明ぶんめいなり。夫おの秦しんは六國りくこくを亡なして。始皇しやうわう帝てい
 と稱なづし。魏ぎは漢帝かんていを亡なし。晋しんは魏ぎを篡せんひ。及およ元げんの宋そうを亡なす。至いた
 て。中華ちゆうか悉しつく俗ぞくを變へじて。夷狄えいてきの風ふうに歸かへする等らうのとは。竟けいに聞き
 及およばざるなり。日域にっこく小國せうこくなりと雖いふども。異國いこくの大軍たいぐんも是こゝを取と
 と能あたわらず。是こゝ我が神明しんめいの道みちの異域いこくに超越ちゆうえつて。威德いとく巍巍ゑゑたり。靈
 魂こん了りやうたる故ゆゑならずや。政家せいけ以もて今いまを始はめ。神職しんしやく以もて古いにしへを祭まつ
 る。己おのれに行なひ。民たみに教しゆるを。是こゝ我わが 神明しんめいの眞儒しんじゆと云いふ。古いにしへは政家せいけ
 神職しんしやく兼かね傳つたて。直ただに行なわれけれども。其そのの後のち分わかれて二ふたとなり。即すなはち

今の攝家と卜家は是なり。近來儒佛附會の教は。家家に皆神道の秘授を失しより。後人の混亂するを習傳て正義也と誤るのみ。然れども朝廷并に神學に委き者は。其の的傳を受け得て。皇天神武の正道今に炳然たり。然るを此國に生ながら異國の聖人を貴んで。吾祖神を蔑り輕ずるは。其の家の主君を蔑て。卻他の主君を敬が如し。不忠とや爲ん。不義とや爲ん。況や先君皆各其の道を尊崇し玉ふて。神社佛閣六十餘州に充滿せり。然に僅の才學に誇て。巫祝左道の類なりとして可ならんや。天照大神の託を西天の真人に譲り玉ふを始として。豐受大神は法燈國師に衣を乞。宇治大神は。大空禪師に

戒を受。出雲の大神は。雲樹三光の室に入。北野天神は。徑山の堂に升。是等は神明の佛法を崇め玉ふ驗なり。吾上宮太子は神儒佛三道の中興にして。常に曰は。神は人の始を教。儒は人の中を教。佛は人の終を教るとぞかし。樹の根莖有て枝葉有り。枝葉有て花果あり。花果有て。又根莖を生ずるが如し。神は根莖なり。儒は枝葉なり。佛は花果なり。三道互に扶て。一个道徳の大樹を成すと云へり。藤家先祖の鎌足公幼稚にして。太子に仕へ。神の旨を傳へ受て。上の始中終の道を以て。君を泰山の安に置玉ふ。此の後代代の聖君賢臣。皆禪に參じ法を明めて。其の徳を天下國家に及す者。勝て數べからず。中にも平

の時頼は聖一大覺の旨を悟て。仁政を千歳に稱し。楠正成は
 三光關山の禪に徹して。忠功を萬世に顯す。甲斐の信玄は快
 川等の諸師に參じて。兵法の一家を立て。越後の謙信は。鐵堂
 等の諸老に謁して。武威を四塞に震ふ。今川の雪齋長老と云
 は。即清見の太原和尚にて侍べる。義元是を師として。禪關を
 究わめ。武道に達して。皇祚を守り。黎民を養ふ。是をも國家に
 益なしと云べけんや。然るに今其の王業の廢れ。聖徳の塞れ
 るを。惜み哀む心無は。身を忘れ心を欺に似侍らん乎。中にも
 若仁義の道を慕ひ。忠孝の教を志さず。君子の輩あらは。三度
 此文を復せよ。若能く自性を明らめ得。自知を研き出し玉は

彼克己復禮の大仁了了として手に入て。堯舜を羹牆に見。
 文武を旦暮に伴なうとを得て。誠に聖君賢臣と云はれんも
 恥末らましく已矣。

右御不審の有増書紀し。佛法神道の蔑べからざるとと。參
 禪學道の天下國家に。益なきに非るとを。書著はす。此上の
 御不審あらは。直面にて。御尋是有べく候。紙筆に著しそろ
 とは。其文法に泥。故事來歴を争て。遞に筆陳の様に相成そ
 ろて。眞實の旨を。失ふ者に候。仍て向後は書を以て。御答へ
 申さず候穴賢

示村林無文齋

大凡修行は時を知るを第一とす。若時を知らざれば無益の功を費し。却て己が道力を損ず。譬は春は耕し。夏は耘り。秋は收め。冬は藏すが如し。公己に春の時を経て耕す功成て。見性の苗うるはしく殖満り。今よりは夏の時を第一として。一切の田地へ移し植て。耘るの功のみ。其餘の事は。秋冬の時に還して然るべし。一切の田地とは。順境。逆境。動靜。憂喜の間に於て。那箇一片得力底の大禪定を移し用ひて。熟せしむべし。耘ると云は。善念。惡念。迷心。悟心。出るに任て。照破して。物に勝るゝの大機を研磨ると。一振の名劔の如くなる是なり。此の外古則公案等は。先暫く延引すべき事。專要なり。古人も得力の

時は。歡喜甚しければ。却て道根を損ずとて。三日三夜寢させしもあり。兀菴の二字を書て。三年是を守るべしと教し。名師もあり。洞上の古徳は。見性の後。三年偏正三昧を修せしむ。偏正三昧とは。我示す處の夏の修行なり。總じて古徳は。各各落着て。徐々と根本より修行す。然に此節古則など。僉議する時は。歡喜心にて。曾中少く動轉しある上に。又彼れ是れもがき。道根自然に損じて。譬は幼少の稚子に。品品の藝を教ゆると。なふりちらけて。責め殺すが如し。是行者第一用心の至要なり。若此の嚴制に違せは。決して野僧が同參にあらず。

示世繼利貞禪尼

夫れ參禪は。行住坐臥の上に有て。動靜によらず。只見聞の間に心を認。我が佛性は如何なる者ぞ。空とや爲。有とや爲。又かく見るものは何物ぞ。かく聞くものは何物ぞ。尙かくも疑も。のは。是誰と。尋常捨置ず。長久遠大の志を以て疑べし。必ず自分の智慧才覺を出して。此の道理ならん。彼の道理ならん。少しも了簡を加ふると勿れ。只工夫純熟すれば。佛性自ら現前す。又人の説き聞せる道理を以て。我見解の扶にすると勿れ。設使如何程の玄妙の理なりとも。皆是れ古人の糟粕にして。汝が眞の正道に非ず。是を以て。祖師の語にも。蠱毒の郷を過る時に。水一滴を沾すと。得ざるが如くにせよと云へり。譬は

飲食の風味を説しめすが如し。みづから嘗て見ざれば。正味を知ると能わず。辛きに多種あり。甘きにも多種あり。況や但只此の道理を辨へて。人の言説を假らず。自身の佛性を疑べし。是れ我宗の正行なり。然れども學者の根機足ざれば。信心專精ならず。工夫純一ならざれば。日を隔つる瘡の。一度は熱し。一度は寒毛豎が如く。年月を累ぬる計にて。眞正の田地に到らず。是故に常に佛祖に誓ひ求めて。自利利他の大願心を祈るべし。又身命財を擲て。深く法を求るを。諸佛衆生平等供養の大布施とす。諸念起れば。直に工夫を以て制するを持戒とす。能く萬境にたゑて。心を動せざるを。忍辱とす。片時も忘

れず。全體相續するを。精進とす。工夫常に現前して。他念なきを禪定とす。迷心起れば。工夫を以て覺破するを般若とす。坐禪靜慮を修して。心の亂れを治め。佛教祖錄に就て。志の誤を正すを方便とす。一切衆生の苦患を觀察し。三世諸聖の慈行を慕ひ學ぶを願波羅蜜とす。工夫増進すれば。業障日に滅して。身心自在なるを。力波羅蜜とす。功行圓滿し。時節到來すれば。佛性頓に現前するを。智波羅蜜とす。是れ初心の學者。平生用心の趣きなり。其の中間。何様の障礙あるとも。棄置と勿れ。若退心起るとも。又打返打返て。往過を咎めず。已後を慎み。工夫の忘れ安きを患へず。只思ひ出し。引返すと遲きを患へて。

那時か是れ打失の處。那時か是れ不打失の處と。強て心掛あらば。必定して。道を得んと。槌を持って大地を打が如じ。何ぞ疑とを用ひん。若又佛性眞箇に現前せば。古人の公案を以て。試むべし。差別の關銷向上の一路など。云と。皆是見性以後に。重重に鍊磨して。淺深麤細を辨別し。佛祖の骨髓を徹證せしむるの大事なり。明師に見へて。決擇すべし。錯て會すると勿れ。

示世繼了智禪尼

厥後は打絶て。消息も承わらず。修行の志し增長致しそろや。平生の工夫御心掛なされそろや。卑濕汚泥に蓮の花開きそ

ろや有り難き結構なる。自性の蓮花を煩惱の汚泥に染そるは。勿體なき事なりと。日夜に恭敬禮拜成され。持佛堂の本尊より。大切に供養なさるべく候。其の供養物には。別の子細はなし。彼の見聞の工夫は。第一の飯と。御心得坐禪は。汁の如し。懺悔發願は。菜の如し。偕堪忍の椀に盛。正直の膳に排。信心の箸を以て。自己本有の如來を供養すべし。茶湯には柔順の心を善とす。上たる人には敬ひ。同じ下なる者は。あはれみをかけて。悪き輩を憎まず。恚らず。言葉和に。物の道理を云きかせ。彼れも是れも。皆自分の稚子を思と。同様に心挂るを。柔和善順の人と申す也。如斯の供物を以て。日夜に自身佛を祭るを。

諸の供養の中には。法供養第一なりと。佛も讚嘆成され候。是を常々御心挂なされ。其供養の鹽梅好出來を。平生の樂とし。此の外に樂むべき者は。世の中に一向是れ無と。觀念なさるべくそろ。折節法語遣し申す様にと。吳吳御頼そろ。志しの貴ま。思ひ出し。筆に任せて。書き述遣し候。穴賢。

快馬鞭卷之中畢

東嶺和尚法語快馬鞭卷之下

小師 了 慧 參

參學 玄 如 校

發心修行之文

夫れ圓滿の覺體は一切衆生の身の上に本より具足して凡そ衆生ものに佛ならざる者は無。譬は大日輪の普く照せども。目なき人は見ると能ざるが如く。其れ大智慧光明は常に前後左右に輝き亘りて。諸佛菩薩に少も異なると無れども。悟の眼なき故に。唯目前の境界に心散亂れて。早晚其の有様を見失ひしより以來。貪瞋癡の間に惑ひぬれば。終に心も心

につれて。諸品の身となる。六道の間に互に親と爲子となり。夫婦兄弟と成り縁に任せ業に曳れて。一度は逢。一度は別れて。幾千萬生と云とも無く。浮ぬ沈ぬしける程に。凡そ生ある者は。魚鳥蚤蠶の類までも。皆前生の父母兄弟爲ざる者はなし。彼も皆己が佛身を見失ひしより。是迷ひ苦む。我も同く我佛身を見失ひしより。是迄も取誤て。唯目前の境界にのみ奪れて。いつ果しもなく。同じ三途の業を造けるぞかし。想に彼の多くの者どもは。前生の業深ければ。未だ餓鬼畜生の間に吟ふ中に。何の幸ぞ。我等のみ貴くも。人の身を受け。刹佛の法の上も無とまでも。聞侍りたれば。何卒我が本具の佛性を見

出し。諸佛菩薩に劣らぬ智徳をも取返。竟には自在の力用までも。残るとも無。研き出して。又彼の前世の父母兄弟にて在し。六道の者共を悉く救ひ取。一度は迷わぬ先の菩薩場へ引返して。本の通佛身と成り得させたき事なりと思ひ。願くは諸佛菩薩も。深く哀愍をたれ玉ひ。諸天善神も。各威神力を加へ業障を消滅して。疾疾本具の佛性を。現前せしめ玉へと祈るべし。唯返返も。我が佛性は如何なる者ぞ。見る者は何物ぞ。聞く者は何物ぞ。佛性ならば。なごか我許見出し得ぬもの有べき。如何に愚なる者なればとて。佛性に相違はなきものを見出し得ぬは。本意なき事にあらずや。何卒して我小知小見

止まらず。幾重の關をも踏破て。眞箇の佛性を明らめ。佛祖の境界に入得て。猶又其上の差別の智慧。向上の宗旨までも。分相應の丹誠を盡して。生れ變り死に化してなりとも。十分に手に入れずは。置まじきぞ。其差別向上の法理とても。皆我佛性の中の。本有を僉議して。至て擇び上たる處なれば。先根本の佛性を見出用ひ得たる上の事也。左之右之。我佛性は如何様の物なるぞ。水に在て水を知す。火に入ながら。火を覺へざる如くなり。と聞及びぬれば。さぞ我が今の目の前に。佛性の道理あるべしと。深く疑へし。然れども。若目の前の境界をのみ疑はし。妄想の心自然に起り易し。唯其の目前の境界を見

る底の者は何物ぞ。聞く底の者は何物ぞ。又如斯疑ふ者は何物ぞ。起ても居ても。寐も寤も。工夫を相續するを第一とす。是の如きの法の道理を辨知りて。發願修行の心。眞實ならば。大地は打はずとも。見性成佛は。疑ひ有べからず。

病中三の用心の事

○一には。死を極む。生死無常は人間の定法なり。況や道人。生死事大を以て。平生の受用とす。是の故に病中に。先死を極て事に迷わず。身を看病の人に任せて。安心にして住すべし。○二には。息に依て。身心疲れて。行業及ぶべからず。只息風の身の内に觸るゝを覺ふ。是を諸法實相の境として。正念相續

を試むべし。

○三には。願を勵ます。病ひ若治せば。益心を改め。行を勵すと誓ふ。命若し盡なば。日比の大願の如く。大丈夫の身を受けて。一聞千悟の人と爲。普く一切衆生を利せんと。勇み誓なり。
右病中の用心とは。雖とも。無病の人。油斷有可らず。

發願文の事

○南無佛。南無法。南無僧。南無自身具足圓滿の如來。今我三の大願を起す。願は大慈大悲哀愍して。此心扶玉へ。
○一の願には。我身本より佛の性を得て。智慧神通相好光明。皆具足して。佛菩薩と同體の徳有共。貪瞋癡の業に味れて。淺

猿の身となる。我願は佛法僧の三法に。歸依して。一度は我に具りたる。佛の性を見届ずんば。置可らず。

○二の願には。左有から悉く人人も。同じ親子兄弟。一門他人。並に。餓鬼畜生地獄の罪人に至る迄。皆眞の佛の性を失ひ。假の此身に迷てこそ。種種の苦患を受るなり。我願くは。早く我か性徳の一切智を得て。普く是等の本の佛の道に歸しめすんは有べからず。

○三の願には。我今より後。生生世世。此二の願に依て。分に隨て。修行し。よしや。身は情とも。志は退かず。菩提心次第に増長して。誓て邪見の路に入ず。我も人も諸共に。菩薩行願の海に

遊あそで。遂ついにに諸佛の上も無な道ちを成就じゆせんとき。

○願以此功德普及於一切。我等與衆生。皆共成佛道。

十方三世一切諸佛。諸尊菩薩摩訶薩。摩訶般若波羅蜜。

○

○道歌三十一首

庚午の夏江戸牛島の庵に在て道歌二十一首を詠し

てもつて信男信女にあたへたまふ

もどよりもほとけとおなしわれなから

なにとてかくはまよひぬるらむ

たちるにも見るやきくやと氣をつけて

うせにしもどのわれそこひしき

目に見るとみよにきくとをしるへにて

たよひたすらにたつねいるへし

たつぬればかれこれ法のあらはれて

得るそ知るそとまどふかなしさ

ふみそめてなをやまふかくいりぬれば

ゆきまかふへきみちのおほさよ

とにかくに信と願とをいにしへの

人にならひてゆるかせにすな

あさゆふにほとけにいのり祖にちかひ

さくれやみちのあらむかきりき
 ふかくおもひたけくうたかふころあらは
 ほとけの性もめのまへに見舞
 あらばれてかゝ見にもものうづれども
 なかくいろはわからさりけり
 これよりはひたすらみかけならひてし
 ころのあかのあらんかきりは
 みかきゆくかゝみのあかのありなしは
 差別のかけきうつしてそしる
 見る性はいちひやうどうの鏡なれど

言句のかけはせんしやまんへつ
 うつりてもこまかにしなのわからすは
 またひやうどうのくまありとしれ
 くもりなくあまりにかけのうつりぬれば
 かゝみすなはちものとなりけれ
 かくまてにさどりのそこまつくしても
 やしなふみちにいまをばつたひ
 まるめてはまたうちくたきくたきては
 またはまるめてとし月をへよ
 きのふよりけふはくふうのまさるかど

こゝろみたまつしんの志やうねん
 すとをかすたゝあしむとにきをつけて
 ありやくととふ主人公
 志かくとほとけや祖師のいたゝきを
 ふみしめてゆく峯のほそみち
 いたり得ていゑにかへりてわれひとり
 ねたりおきたり志る人もなし
 かへり見て來しみちすちのありさまを
 かたりてをしふ里の人く

快馬鞭卷之下畢

快馬鞭後序

師諱圓慈字東嶺。江州神崎縣人。族源氏。宇多天皇九世之孫。佐々貴裔也。五歲而謁古月和尙。有出家之志。九歲而父投干本州大德亮山和尙。薙髮受具。十七歲而南方發足。初謁古月翠嶺之二大老。晨參暮請。無敢倦矣。於雲門胡餅話。得入處。次入丹之大道和尙室。侍巾瓶也。凡三年矣。以爲雖見數員。善知識一箇而無。如古人雪峯嵩頭之用處者。不如此去。向山中苦修。遂拂衣還鄉。於蓮華峰。締菴。日夜打坐。至寢食偕廢。居之久。一事無所得。寬保元辛酉年。某月一日。坐久疲倦。自謂道高則魔盛也。今我是何障礙耶。我於此生。誓不求道。言訖。放身仆矣。頭未到地。豁然大悟。卽

作偈曰。法王身矣。法王身。大地山河絕一塵。佛教祖禪元有我。頭々無不少林春。翌年春。之駿陽謁于鵠林。林一見如舊相識。往復問答。在無盡燈論。第六向上章。今畧焉。尋求印可。林即授衣并法語。曰。圓慈首座。潛參密究。超越流輩。辛鍊苦修。不顧軀命。久而微見。正受老人平生受用。可謂勤矣。是故我。正法眼藏。竝兩三件口訣。全授與了也。誓扶起已墜真風。永相續焉。云云。師初住無量。初開龍澤。請鵠林老師。爲開祖。自謙爲二世。大振鵠林門風。衲子麤至。無處容多衆。第宇柴扉。頗有綿蕪。風可謂東道主人也。一住二十餘年。無日不接衆。寬政辛亥春。應尾瑞泉。與輝東。荒廢規矩森森嚴嚴矣。時有大風吹折林木。比屋顛仆者十之一。鄉人僉言。輝

東大木吹倒。古碣放光射天。衆聞焉駭。從是師有西歸之嘆。臨行作偈示徒曰。人生七十古來稀。出輝東菴。何國之。老僧今年七十一。出輝東菴。何國之。遂促駕赴江州。鄉人瓜畎縣々留師。令居齡仙精舍。日講自注三法孝經。四衆臨筵。末後一日陞座。既欲下座。侍者請與衆說法。師怒罵一聲而下座。時寬政壬子春。閏二月十九日。示微恙。溘然坐寂。塵壽七十二。慧臘六十三。弟子奉全身。在瑞泉之西河側。關維得設利羅無數矣。塔于輝東。坤維曰兒孫放光。在于龍澤。曰三光嗣其法者。豐洲英。聯燈多。關堂樞是也。其餘得法者。隨分揚化者。在于四方。人僉知之。吾豈敢所識乎哉。今茲春。遊方日得。曰師遺穗入道要訣者。讀之。恰似面聽。示誨者。故尋

求散在四方者。編曰快馬鞭。乃鑿于諸版。匪欲公于世。唯與信男
信女。欲爲快馬一鞭者也。已矣。

于時寬政庚申臘月丁卯

參學霧隱叟謹撰

明治廿六年八月十一日 翻刻印刷
明治廿六年八月十四日發行

正價金拾錢

故

著述者 東嶺和尚大禪師

東京府士族

一 校正者 三倉 鉦三郎

東京市淺草區北清島町八番地

東京府士族

印刷者 根岸 高光

東京市牛込區市谷加賀町壹丁目廿三番地

印刷所 秀英舍工場

東京市牛込區市谷加賀町壹丁目十二番地(電話番號十九番)

大 賣 捌 所

東京

森江佐七

麻布區飯倉町五丁目

全

鴻盟社

芝區愛宕下町四丁目

全

明教社

京橋區三十間堀町

全

宇田總兵衛

京橋區南傳馬町

全

吉田久兵衛

淺草區北東仲町

全

伊藤清九郎

淺草區北松山町

全

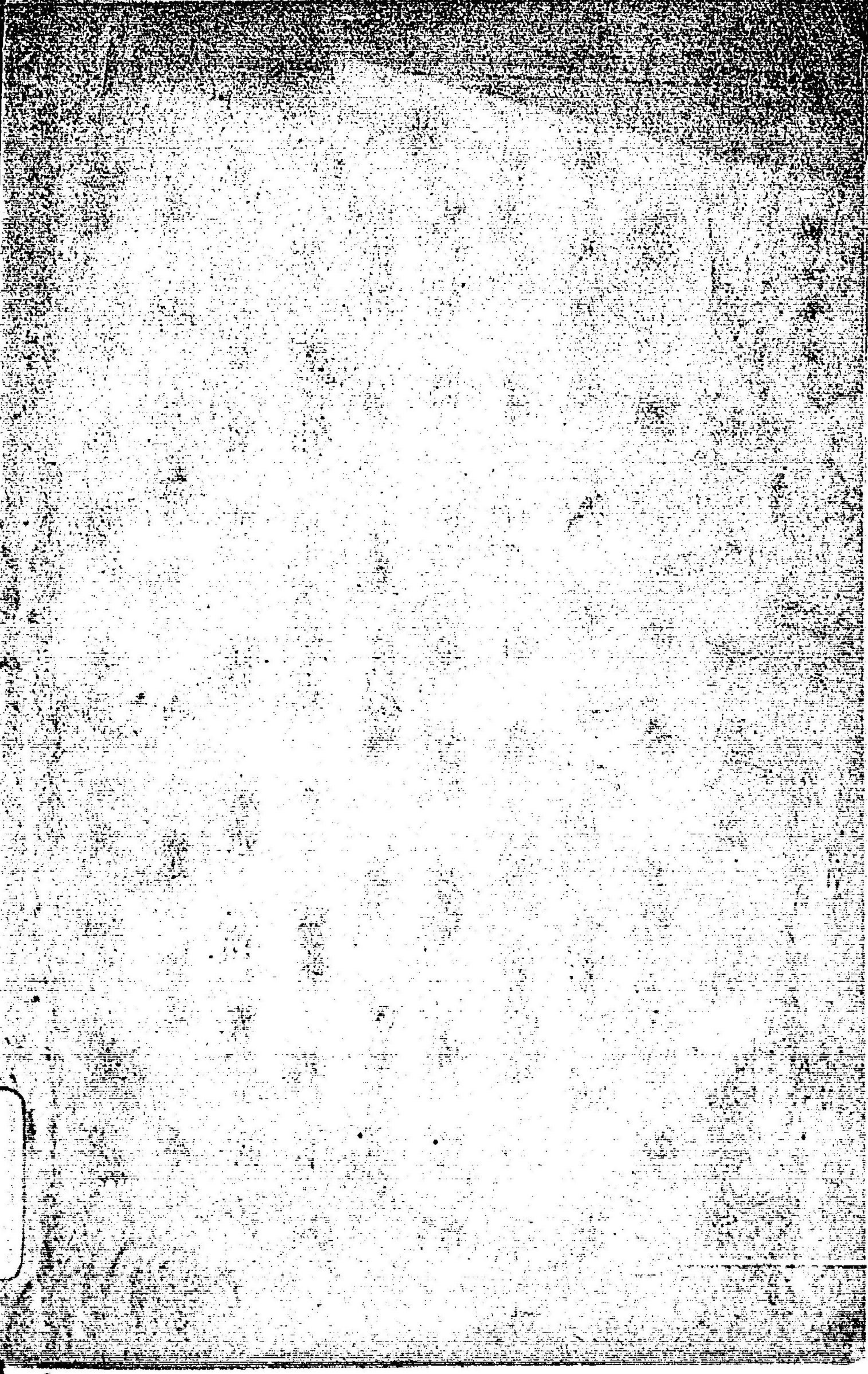
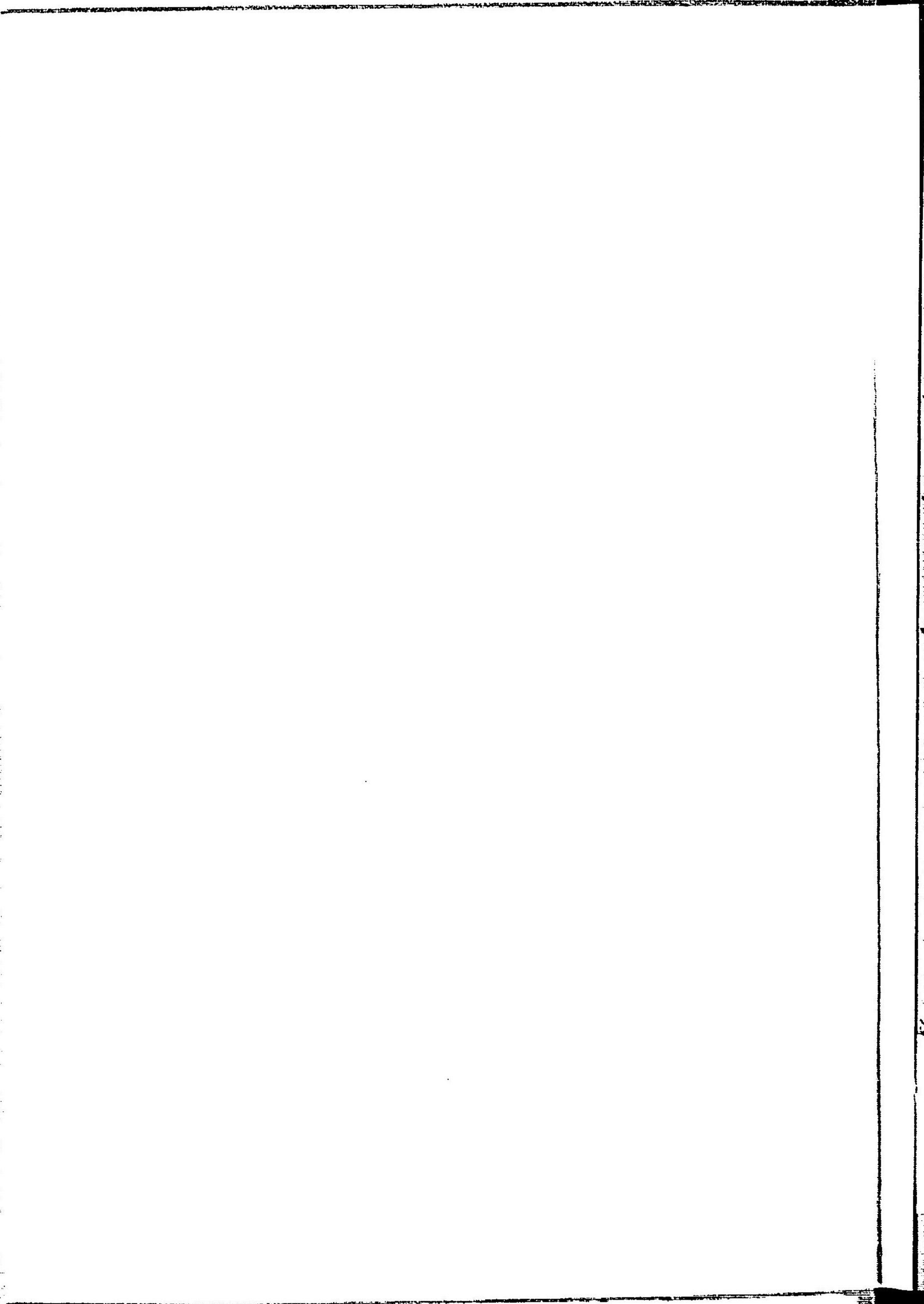
松澤庄次郎

下谷區南稻荷町

愛知縣

三浦兼助

名古屋市門前町十七番戶



1950
1951
1952
1953
1954
1955
1956
1957
1958
1959
1960
1961
1962
1963
1964
1965
1966
1967
1968
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999
2000
2001
2002
2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2020
2021
2022
2023
2024
2025

特47
26

入道要訣快馬鞭
国立国会図書館

019771-000-7

特47-26

東嶺和尚法語快馬鞭

東嶺和尚大禪師 / 著

M26.8

ABG-0584

